



ヨーロッパの気象台を巡って

佐 貫 亦 男

1. イタリアの気象台

5月21日ローマに着いた朝、まずスイスに飛ぶ飛行機の予約をすませ、その足で気象台に行くつもりで、街角に立っている巡査に道順を聞いて市電に乗った。ローマはもう何回目かの訪問で、慣れているはずだが、最後の市電の停留場からまだ相当歩かなければならなかった。後で地図を買って調べて見たら、ローマ中央停車場(Roma Termini、終着駅という名で日本に知られている)からわけもなく歩いて行かれる距離にあった。大変な廻り路をただけである。

ローマの中央気象台はイタリア航空国防省(Ministero della Difesa-Aeronautica, Servizio Meteorologico, 4 Viale Università, Roma)の中にある。ホテルに旅券を預けたままで行ったので受付では Passaporto (旅券)を要求して、どうしても取りついでくれない。10人ばかり高い台の上にならんだ受付子は、阿呆の陳列会という具合で、その中の1人は、私の下げて行った品物を見て、ははん、ゾンデだなどいっては呉れたが、先方の承諾書を見せても承知しないのであった。この中に英語かドイツ語を話す者はいないかと呼びかけたら、私がドイツ語を話すというのが1人いた。事情を述べると、よくわかったが、旅券が無いと入れぬ規則だから出直して欲しいという。あきらめて戻った。

次の日は用心して、国防省に電話をかけ、英語を解する士官を電話口と呼んで貰い、これから訪問するからと断り、今度は旅券を携えて乗りこんだ。受付には案内者が待っていて気象台につれて行ってくれた。

最初は Mastrangeli 大尉で、副官の役をしているらしく英語を解し、早速 Fea 中佐、Cena 大尉に紹介して貰った。両人とも本台の川畑博士とトロントで会っているし、同博士の紹介状も持参したので、非常に快よく会見してくれた。フェア中佐の英語は下手で、ともすればフランス語でしゃべり出す。ツェナ大尉は落ちついた学者という感じの人で、上背のある、どこか川畑博士に似たところがあった。

持参したゾンデを寄贈し、イタリアのゾンデを所望したが、現在使用中のものは米国からの購入品で、しかも

古い型であったので辞退した。

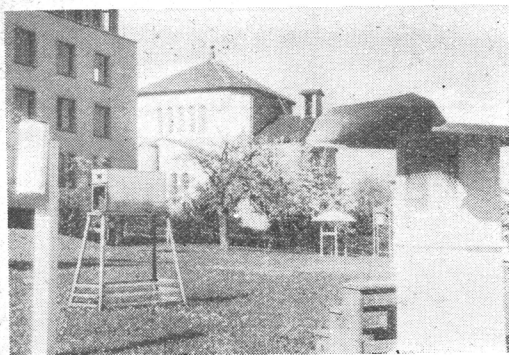
日本の気象測器の現状を紹介し、イタリアの事情を聞いたが、特に目新しいと思われるものはなかった。終って Landi 少佐を長とする予報現業室を見学し、Bilancini 教授が司書をしている図書室で、日本からの雑誌文献の整理状況を見せて貰い、君の論文も分類してあるなどと愛想をいわれた。フースの正規気圧計を使用中で、その他のイタリアの気象測器が予想通り、なかなか高級な工作を施してあるのに感服した。これは後でイタリアの工作機械工場などで見聞したことだが、技術水準はかなり高度で、特にアイデアの国であると強い印象を受けた次第である。ファクシミリもイタリア製であった。

なお現在ローマは東洋からヨーロッパに入る関門で、気象人も今後イタリアに必ず滞在する機会があると思うが、イタリア語の初歩を心得て行くことをすすめた。なるほどホテルでは絶対に英語が通用し、うっかりすれば日本語を解するボーイなど存在する。しかしローマの街で、あるいはローマを出たとき、イタリア語の一語も解しなかったら、その困惑は大きい。私自身、若いころローマの停車場の改札口で、発車の時刻が迫っているのに入場させてくれないので泣き出したくなった思い出がある。問題は回遊切符に使用開始日のスタンプを案内所で押して貰って来てくれというのに過ぎなかったが、その後ローマを何度か訪問し、日常の僅かのイタリア語を覚えたことが、今度の旅行でどれだけ役に立ったかわからぬ。もっともどんなトラブルでも何とか解決がつくものであるし、またこんなトラブルにスリルを感じる人は別問題である。しかし多少でも外国人の気質に触れたいと思うならば、その国語を解することが最上である。

2. スイスの気象台

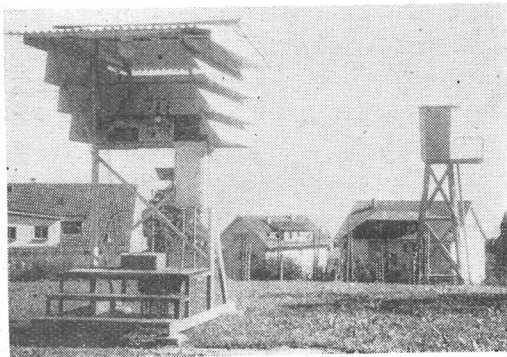
5月24日の朝、宿からルージュン台長の自宅に電話をかけ、台長に電話に出て戴いて、御尽力願った佐貫ですが、これから気象台に何って御目にかかりたいと申し入れた。そしたらあまり早朝から来て困るから10時半ごろにしてくれという返事であった。

約束のとおり11時近くスイス中央気象台(Schweiz-



第1図 スイス中央気象台露場（東側より撮影）
各種雨量計及び百葉箱に注意。

erische Meteorologische Zentralanstalt, Krähbühlstrasse 58, Zürich) を訪問した。チューリヒの山手の坂にある小さい役所であった。前を市電が通っていて、後からはもっぱらこれを利用した。屋上には風速計その他の目標があるから間違いはない。玄関の受付子は不在なので、掲示の通り秘書室をノックした。するとフランス語で返事があり、出て来たのは年のころ 30 と 40 の間の眼鏡をかけた老嬢で、これがスイス気象台に重要な役割をはたす Mademoiselle Bontems (よい天気と読めぬこともない、自分でも気象台むきの名前でしょうと自讃していた) であった。先方がフランス語を使うものだから、うっかりフランス語で返事したら、これがいけなかった。その後気象台には毎日のように出入りし、ルージョン 台長が室をよろうかといったくらいだったが、ボンタン女史は決してフランス語以外は用いてくれなかった。こちらが気分のよいときは通じるが、疲れているときは適当な言葉も出ないし、先方のいうこともわからない。無理して話をすると、女史は腹をかかえて笑い、しばらくして気がついて、決してあなたを馬鹿にしているわけではありませんよ、ただ表現があんまり奇抜だからと弁解していた。それでいて電話はドイツ語でか



第2図 スイス中央気象台露場（南側
に向って撮影）
面白い形の百葉箱に注意。

けているのであった。英語もできるらしい。どうしてもフランス語を教育してやろうと決心していたのかも知れぬ。最初が大切であつたらしい。台員が女史に話するのは全部フランス語であった。

ルージョン先生はもう御出勤で、早速挨拶と持参のゾンドを贈呈し、北斎の富士の錦絵を差上げ、電光を示して、先生の御専門と関係がないこともありますまいという、大いに喜んで握手してくれた。

風貌は眼鏡をかけ、ひげを蓄え、かっぱくのよい、ちょっと藤原先生を思わせるところがあった。なかなかのワマンで、ほかの台員は遠くから敬意を拂っているかに見えた。自室のドアには蛙が視天望氣している絵はがきをピンで貼ってあり、その下に Wetterprophet (天気予報官) と印刷してあった。誰のいたずらか、蛙には Lugeon と鉛筆で書きこんである。

台長は Dr. Max Schüepp を呼んでこれからの世話掛にしてくれた。近視のきちょうめんな男で測候課長という格であった。その案内でまず Heinrich Uttinger に会いたいといったら、本人が自室から出てきた。やはり眼鏡をかけた、背の高い働き盛りの若々しい感じの人



第3図 スイス中央気象台露場（南側
に向って撮影）の積算降水量計。

で、もっと老人かと思ったといったら、傍からシュエップ博士が、白ひげの生えた教授を想像したろうとつけ加えてくれた。ウティンガーは、じよだんいうな、君はいくつになるというので、46才だと答えたら、おれは48才だよとのことであった。

ウティンガーはさっぱりした気持のよい男で、前から論文の交換を行っていたが、今度の調査の主目的の一つでもあった。彼の作ったスイス降水量分布図はすばらしいもので、かねてから敬意を拂っていたものである。それでも、あれは Phantasie (想像) だよと遠慮していた。また Hoeck の提案した斜面に平行に置く受水口はまだ研究中で、実施してはいないなどといった。

渡欧後あまり悪天気ばかり続くので、一体いつになったらほんとうの夏が来るんだ、Wann kommt der eigentliche Sommer denn? とウティンガーに聞いた

ら、来年だよ、Nächstes Jahr と答えたのには爆笑した。またルージョン台長の留守のとき、台長はこの夏どこか外国に行かれるそうだが、どこかねと聞いたら、そんなことはおれの知ったことではない、知りたかったらボンタンに聞けといって、台長が私用でどこへ行こうが勝手だという調子であった。

次長は Dr. E. Wanner で地震課長、予報課長は Dr. J. Häfelin で、測候課長のジュエップ博士、農業気象係長の Dr. B. Primault、同じ係の M. Grütter、霜予報係の W. Kuhn、それに J. Rieker の諸氏は皆予報現業をやるそうである。航空気象課長は O. Weber でチューリヒ・クローテンの飛行場勤務である。

ルージョン台長にスイス気象台の予算を聞いたら、1954 年は 200 万スイスフラン（約 1 億 8 千万円）といっていた。人員はバイエルンの高層気象台、ロカルノの輻射観測所とゼンティスの山岳観測所を含めて 102 人、もちろん依托観測所などを除いての話である。

中央気象台は各人が一室を持ち、静かに落ちついて研究も励んでいる様子であった。ウティンガーの室からは、チューリヒの湖を越してグラルスアルプスが一望のもとに収まり、うらやましいくらい環境であった。

毎週行っているコロキウムに、日本の測器の現状を話してくれというので、着いた次の日、台長初め全員の集った席で 2 時間ばかり講演をした。用語は英語かドイツ語かと相談すると、もちろんドイツ語がよいと全員がいう。

ときどき術語でつまずくと、ルージョン先生に伺いを立てて教えて戴いて話を進めた。隔測施設、無線雨量計、レーダーとなると、かなり全員の興味を引いた様子で、細かい質問も出た。

終ってルージョン台長から台員に、日本のゾンデの寄贈があった旨のひろろがあり、2 本の温度計によるチェックの入っている点は学ぶべきであるといつて居られた。

そして遠来の客に何かスイスのものをというので、ゼンティスで撮影した雲の天然色 16 mm 映画とドイツ製の動く天気図の映画を見せてくれた。

検定は風と湿度の測器はここでいい、(吹出口径 70 cm, 18 馬力、最高風速 40 m/s の小さい風洞がある) 気圧、温度は、ベルンの度量衡局 Amt für Länge und Gewicht で実施するそうである。

ルージョン台長がボンタン女史にいつけて、安い下宿というこちらの頼みを、Pension Dolderburg, Dolderstrasse 96, Zürich に紹介してくれた。主人は Züssli といい、3 食つきで 15 フラン（1,350 円、ただし 15% のサービス料がつく）の小さい室を取った。宿帳を調べて見ると、フランスの気象台長 Viaut などが泊ったことがあり、気象研究所の畠山所長も 1951 年にここを宿

としたので、主人はよく覚えていた。それで君の家は『気象の家』だといってやったら喜んでた。気象台は外国からの客をここともう一軒に紹介するらしい。私はこの宿を根拠地にしてスイスに出没した。親切な主人夫妻であったが、最後に寄ったとき細君は入院していた。兩人とも英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語何でも話す。

2. ダヴォスの 2 研究所

ダヴォスを訪れたのは 5 月 30 日の日曜であった。レストランで昼食を取って、電話帳で調べ物理気象研究所 Physikalisch-Meteorologisches Observatorium, Davos-Platz の所長 Dr. W. Mörikofer の宅に電話かけたら、ちょうど外出中で奥さんが出て、こちらの電話番号を聞き後で電話するとのことであった。食事がすまぬうちに電話の呼出しがあり、今日は日曜で具合がわるいから明日午前中に研究所に来てくれという話になった。研究所の位置を聞くと、駅前教会の裏手の、屋上に風



第 4 図 ダヴォス物理気象研究所
入口は左角を曲ったところ、建物右半分は Villa Dora という宿屋。

速計が見える建物だからすぐわかるよという。

それで近所の小さい宿に室を取り、念のため教えられた場所へ行ってみると、確かにブロンズの看板が出ていた。面白いことには Villa Dora とかいう宿屋らしいものと共同の建物であった。

翌朝訪問すると、左官屋が壁を直していて、2 階の一

室がメリコッファー所長の室であった。実業家タイプの太った人で、測器を見たいというこちらの希望を聞いて早速 P. Bener 氏に案内させて見学させてくれた。その他 H. Wierzejewski が物理学者、E. Nagel, Courvoisier 及び所長が気候学者ということになっている。人員はこのほか精密機械工が2人、秘書が1人、合計8人のささやかさで、1929年創立、経営は Gemeinde というから土地の寄附金によるものである。年予算は10万スイスフラン（約900万円）という。仕事は主として輻射の研究で、ここは結核の療養地だから、そんな関係で作られた研究所かと聞いたら、必ずしもそういうわけではないといっていた。

天気はますます悪くなり、せっかくのダヴォスの風物も面白くはないが、メリコッファー所長が電話をかけてくれたので、国立雪及び雪崩研究所 (Eidgenössisches Institut für Schnee und Lawinenforschung, Weissfluhjoch bei Davos) に行くことにした。その前に駅前で昼食を取り、バスでケーブルカーの駅に行き、スツケースを駅にあずけて、特別便（まだシーズンオフなので一般には運転していない）で研究所に登って行った。

駅に続く研究所の入口のドアを開けると、出て来たのは眼鏡をかけない、がっちりした私と同年配ぐらいの男であった。これがドケルヴァン所長だったのである。初対面で私は神戸大学に行った皆川理博士を思い出した。この印象は間違っていないで、研究所の気分は皆川博士が室長をしていたころの気象研究所電磁研究室に似て、非常になごやかな研究的な空気であった。私は最初から親しみを感じて、あなたの名は前から存じているし、あなたの父上も私の研究に関連して日本で知っていた旨を述べた。所長は素直にうなずいて、雪の測器について教えて欲しいという私の希望により、Dr. Th. Zingg の室に案内してくれた。

チンク博士は農業技師といった風格の素朴な小柄の学者であった。主な質問は雪の測器の設置場所であったが、なるべく谷奥に設置せよ、但し雪の頻度を考慮するという結論であった。バルコニーに出ると積算雪量計など設置してある雪の斜面が見える。ここでは写真測量法 Photogrammetrie による積雪量測定などを行っている。背後の山にエーロヴェーンが見えるので、何国製かと聞くと、イタリーのものだという。

5月31日だというのに、ケーブルカーに乗ってすぐ積雪で、薄い服装の私は心細く感じたが、所内は快適な暖房である。チンク博士が後で案内してくれたが、電熱ボイラーを使っていた。雪の弾性学的性質、結晶などを観測する低温室を見せてもらい、チンク博士の室に帰ると、日本の学者たちからの別刷がたくさん来ていた。積雪の観測カードなどもらっていると、チンク博士の案内の間執務していたドケルヴァン所長が現れて、1942年

に創立した由来や、予算は年間25万スイスフラン（約2,300万円）、内5万フラン（450万円）が研究費だという話をしてくれた。

もう5時の退庁時になったので、ヤッケを着てスキー靴をはいた所長以下所員13人とケーブルカーで下った。雪の斜面でモルモットがいるから見ろと所長が教えてくれる。この雪に何しているんだらうと聞くと寝ているんだという。タイピストと冗談などという明るい性格の人であった。

下の駅で5フラン50サンチームの乗車賃を拂ってスツケースを受取り、停車場に行こうとすると、ドケルヴァン所長が御茶に招待したいからといって近くのレストランに入った。紅茶を飲みながら世間話をしたが、何を話したかももう忘れたくらいに淡々とした会話であった。ただアルプスで採って来た花を手帳から出して見せたら、それは Pelzanemone というよとか、Chur（地名）をどう発音するんだらうといったら、クープだといったのを思い出す（もっとも後でその土地の人間に聞いたらフープだともいったが）。

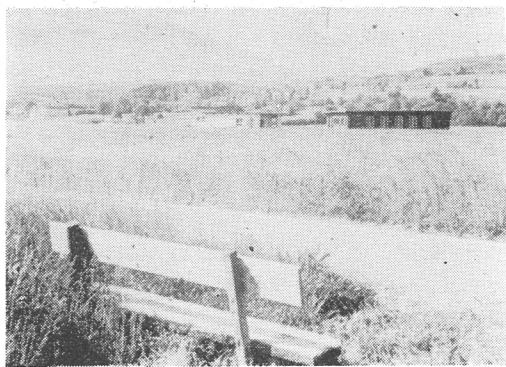
駅まで送って来てくれて、3等の窓からスツケースを入れてくれた親切も忘れられない学者であった。

これらダヴォスの研究所のほかに、チューリヒ気象台のシュエップ博士はロカルノの輻射観測所 Osservatorio Ticinese, Locarno-Monte（所長 Thams 氏）も見たらしくてくれたが果さなかった。

4. バイエルン高層気象観測所

チューリヒからベルンを通りフリブールで乗換えてバイエルン高層気象観測所 Station Aerologique Payerne を訪問したのは6月2日であった。天気は気象台でもまだ定まらない noch nicht beständig と予報していたころであったが、珍らしく晴れて快よい日であった。バイエルン近くから眺めた西のジュラ山系の風物は、緑の牧場と赤い百姓家の瓦、ゆるやかな起伏の丘と森、地平に霞む青い山波であった。私は写真を撮るのも忘れて窓から眺めた。

バイエルンの駅のレストランで昼食を取り、給仕女に高層気象観測所の所在を聞いたがよくわからず、客に聞く地下道を抜けて坂を登った先だという。この辺ではフランス語しか話さないのでも心もとなかったが、果して坂を汗をふきながら登ってもその先は百姓家がならんでいるだけで方角はわからない。ちょうど晝下りを通りには誰もいない。勇気を出して窓に花を飾っているとつぎの百姓家のドアをノックして、出て来た婆さんに挨拶してから聞いて見た。すると前の道を右に行って左に曲るとわかるという。その場合に行くとは咲く原の真中に、写真で見覚えのある低い平家の黒褐色の練瓦葺が見える。想像していたよりは小さく見すばらしく、これが世界的な名声を持つ高層気象観測所とは思えぬくらいで



第5図 バイエレン高層気象観測所

あった。

構内に入ったが、昼食時なので全然人の気配はない。事務所は閉っていた。あきらめて放球場の芝生に横になると隣の野原では百姓がせっせと耕作をしていた。

芝生で30分も日に当たっているとさすがに暑いので、中にゾンデ受信機の見える工作室の玄関に腰を下して待つほどに若い所員がスクーターで出勤して来た。そして事務所の戸を開け観測室に入れ、所長の P. Ackermann の官舎に電話をするからといってくれた。ところがアッカーマン氏がなかなか現れない。

窓から表を眺めると、出て来た所員が2人芝生でフットボールのけいこをしている。ヘッドリングをさせようと高く蹴るボールを相手は受け損じて見当ちがいの方向に頭を出してはフランス語で何か笑っている。しかし観測の準備時刻を考えているのであろう、ときどき腕時計を見てはキックを続けているのであった。どこの気象観測員にも共通なものを感じて私が見ているころ、アッカーマン所長がのっそり現れた。

最初の印象で、私は前橋の沖住雄さんを思い出した。この印象も間違いはなかった。中央から離れてよく部下を統制して成績を上げている様子であった。だから東洋の客を無人の役所に1時間も待たせて、別にあわてる模



第6図 テレゾンデ放球

左の観測員が持っているゾンデ籠の突出棒(緩衝用)に注意。右の人物は所長アッカーマン。気球は画面の上にある。

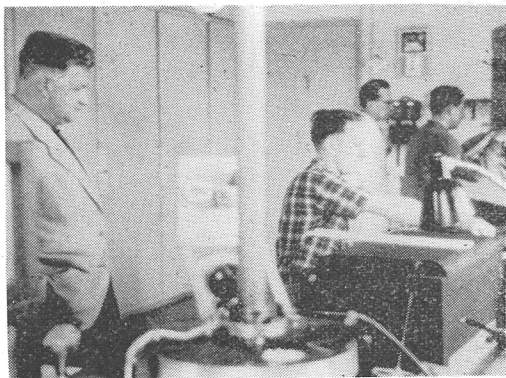
様はない。

所内の検定調整設備を見せた上、島山気象研究所長の署名のある訪問客名簿にサインさせた。各国気象関係者のおびただしい讃辞はこの施設の重要さを物語るものである。

放球は現在3時と15時中欧標準時(GCTより1時間前)に行い、80%は回収し、謝礼は国内発見者には5スイスフラン(約450円)と送料実費、国外発見者には20スイスフラン(約1,800円)であるが、ほとんど国内に落下するという。所員は8人で3交替である。

15時の放球と自記装置を見せてもらったが、所長は若い観測者によく教えていた。この検定装置もすばらしいが、多孔物質の滲透圧を利用する Rüeger の湿度計を気軽に使っていたのは注目した。具合はよいそうで、氷点下のときはどうするといったら、なに毛髪を使うだけだとわけなくかたづけしていた。

水素の爆発事故はないかと聞いたら、前に1度あったかななどといひながら、アッカーマン所長は平気で放球する傍で煙草をふかしていた。次席は M. Bohnenblust



第7図 テレゾンデ観測

右はレーウィン、中央はゾンデ自記器、左は回転アンテナ下端。右より2人目はボーンブルスト次席、最左端はアッカーマン所長。

という、おとなしい男で、何を質問しても必ずアッカーマンに伺いを立ててから返事をするのであった。

放球が終って、アッカーマンの官舎に案内した。これは2階建て、本屋からはちょっと離れていて、中には実験室、観測室があり、Radiogoniograph(空電方向探知機)で自記していた。この観測所にある器械はすべてルージョン台長の考案である旨の銘板がついていた。事務員もゾンデ観測をするという。ゾンデは国産の部品を集めてここで組立てるそうである。値段は日本の倍ぐらいであった。アッカーマンの官舎の入口には物凄いシェパードがいて、吠えつくのには弱った。

見学がすんで帰ろうとすると、アッカーマンが送って来るので辞退しようと思ったら、何のことはない、官舎へ帰って行くのであった。途中で先刻の百姓家の婆さん

が、わかったかと声をかけたので礼をいって駅に戻った。

5. メルカントン教授及び WMO 訪問

パイエルン高層気象観測所を見学した6月2日の夕刻、ロザンヌのスイス中央気象台前々台長 Prof. P. L. Mercanton を訪問した。メルカントン教授には降水量計の広汎な論文があり、日本から私の別刷など送ってあったので敬意を表するつもりであった。

駅から海岸寄りの Avenue Eglise Anglaise 20 の住所を頼りに行ったが、通りの名のように英国教会はあったが、番地札がないので困っていると、男と女の児が通りかかって教えてくれた。

そこは普通のアパートメントの1階で、ベルを鳴らすと、奥さんが出て来て教授は在宅だという。奥さんはミシンを使って仕事で、つましやかな老学者の引退生活がうかがわれるのであった。台所風呂湯のほかは奥さんが仕事している客間と教授の書斎の4間ぐらの住居で、女中などはいないらしい。

教授はそれでもタイプライターを前にして座っていた。強い眼鏡をかけているが、視力も衰えルーペを使わぬと細かい字は読めず、耳も難聴である。私の別刷など、戸棚に雑然と重ねてある印刷物のどこへ入っていることや、第一私の名を知って居られたか疑わしい。

それでも日本から来たというと、田中館、松山、今村、岡田の諸先生の名を挙げ、藤原先生とはベルゲンで一緒だったそうで、拔んでた人物 Ausragender Mensch とほめていた。しかしもう亡くなられたというと、眼の奥に淋しい陰の浮ぶのが見て取られ、あきらめた老人の表情であった。君たちのジェネレーションがわれわれの仕事を継がねばならぬ、君は一体いくつになる、そんな年には見えぬがなどという。

書斎客間とも日本中国の骨董品がぎっしりつまっているのは、東洋に居られたころの贈物であろう。手もとにある別刷の献辞を見ると、Billwiller, Lugeon, Uttinger, Thams その他著名の学者たちで、ありし日の活躍をしのばせるものばかりであった。

もう少し話をしようと思って訪ねたのであったが、気の毒という感じが先に立って30分ほどで辞した。奥さんは元気で、またそれだけ身体の不自由な先生が頼りにして、御客さんが帰るんだと奥さんの名を呼んでも台所で仕事をしていてなかなか出て来なかったのは、昔恐らくルージュン台長のように権勢を振って居られたであ

ろうだけに、見るに忍びない思いであった。

奥さんは台所からエプロンで手をふきながら出て来て、この辺でよい宿はないでしょうかと聞くと、ホテルオリエントが駅前のホテル・コンチネンタルがよいでしょうと教えてくれた。

表に出ると、繁華街から裏へ入りこんだ静かな通りには子供が遊んでいて、いかにも恩給生活者の多いロザンヌの性格を示しているのであった。

ロザンヌのホテル・オリエントはわびしいところで、靴は磨いてないし、便所に紙はないといった安宿であった。スイスもフランス語の地方は、料理のうまくなるのに反比例して待遇が行届かず、ラテン民族の特質を示すのであった。

ジュネーヴでは午前中にジュネーヴ物理器械会社(SIP)を見学し、会社の車で1230の晝休みまで間に合うようWMOに飛んで行った。WMO 或いはフランス語で OMM は1, Avenue de la Paix, Campagne Rigot, Genève が所在地であるけれども、中心から遠いところで、国連本部の近くだが運転手にはわからず、国連の守衛に聞いて初めて探しあてた。国連本部入口前の広場から植込みの中に入った、見すばらしい平家バラックであった。

用件は U.G.G.I. の連絡であったが、いきなり Langlo 氏の室に通された。元気の無い男で、国籍不明(後で聞くとノールウェイ人)、英語、フランス語、ドイツ語と話し出すのでとりとめがなくて弱った。よく聞くと測器に関係していた人で、何か質問したかったが時間がないと思うものだから、U.G.G.I. の用件はパリの本部でやってくれと宛名を聞いただけであった。帰りがけに隣の室に連れて行き、若い男に何とかいいながら紹介して呉れた。後からこれは英国の Ashford とわかったが、面白い人間で、話す声がどこから出て来るのかわからないのであった。顔にはとんきょうな表情を浮かべ、英国へ行ったらレーダーならば East Hill を訪問しなくてはならないと教えてくれたが、腹話術に使われる人形と問答している気がした。

用件をすませてすぐ帰ろうとすると、先方が驚いてもうよいのかと聞いたくらい、あわただしい訪問であったが、WMO がこんなバラックで仕事していることを知ったのは今後何か役に立つであろう。帰りしなにアシュフォードが WMO の雑誌の最近号を1冊くれた。

(つづく) (中央気象台測器課長)

6月12日の読売新聞の伝えるところによると、宇宙線観測用の気球が、気球上昇の新記録を作ったということである。実験はアメリカのミネソタ空港で行われ、直径200フィートのプラスチック製の気球が用いられた。高度は115,000フィート(35キロ)に達し、従来の記

録111,000フィート(33.8キロ)を破った。

ちなみに超高層観測用として用いられるロケットの上昇高度は、Viking 219キロ、V-2号175キロ、Aerobee 112キロで、1947年3月にはV-2号により160キロの上空から地球の写真を撮ることができた。